

聖句

わたしは師のことばを聞いて教えを
楽しみながら、最上の道理に到達す
るために精神統一を実践した

チユーラパンタカ
『テラガーター』(中村元訳)

生 眞

第 79 卷 478 号

<http://canchiin.net>

1・4・7・10月15日発行

【発行所】

眞生 同盟本部
〒105-0011
東京都港区芝公園
2-2-13 観智院

【振替】

00160-6-80674

【電話】

03(3431)1450

【Email】

shinsei@canchiin.net

【編集兼発行人】

土 屋 正 道

会 費	年額 2,000円
	一部 100円

ちり
塵を払わん

あか
垢を除かん

土屋 正道



富楼那 奈良 興福寺

私は小さい時から人一倍物忘れ
が激しく数々の失敗をしています。
記憶力のいい方が羨ましいです。
お釈迦様のお弟子にチユーラパ
ンタカ(周利槃特)という方がい
らっしゃいました。彼は頭脳明晰
な兄マハーパンタカの誘いでお釈
迦様の弟子になりましたが、物忘
れがひどく自らの名前すら忘れて

しまうので名札をつけていたとい
うことです。(彼のお墓から匂い
の強い植物が生えた。その植物を
食べ過ぎると物忘れが激しくなる
という。それがミョウガと言われ
「草冠に名は何?で茗荷」と伝え
られる)彼の愚鈍さに他のお弟子
たちは呆れ、お釈迦様のお名前を
汚すと言うものも現れた。彼は自

らの愚鈍さを悲しみ、兄も弟に精
舎(お釈迦様と弟子の修行の地)
を出て行くように勧めた。彼が出
て行く決心をしてお釈迦様に挨拶
に行くと一本の箒を手渡され次の
ようにおっしゃられた。

「チユーラパンタカ、出て行く前
にこの精舎を掃き清めて行つて
くれないか?」

「はい。ものは覚えられませんが
掃除ならできます」

彼が答えますと、お釈迦様は、

「塵を払わん 垢を除かん」と称
えながら掃くのだよ」
と教えました。

それから毎日チユーラパンタカ
が精舎を掃く姿が見られるようにな
りました。時々お釈迦様がそば
を通りかかり声をお掛けになりま
す。

「チユーラパンタカ、精が出るね。
何か変わったことはあるかね」
「はい、最初は汚れていた精舎が
次第にきれいになり、私も何か
気持ちよく感じるようになりました」

した」

「そうか。それは良かった。まだ汚れているところはないかな？ 精進を続けなさい」

最初、愚鈍なチューラパンタカをバカにしたり、邪険に扱っていた弟子たちもやがて態度が変わっていきました。

お釈迦様は、またお声をかけました。

「チューラパンタカ、何か変わったことはなかったか？」

「はい、私の心が綺麗になったように感じます。今では私を無視していた方も返事を返してくれたり掃除を手伝ってくれたりするようになりました。」

お釈迦様は喜ばれ、彼の手を引き、弟子たちが集まる場所で宣言されました。

「チューラパンタカは、今、阿羅漢果（修行を完成した境地）を得た！ 第一本で、精舎を掃き清め、自らの心を清め、周りの者の心まで清浄にした」

お釈迦様に大衆の前で賞賛されてチューラパンタカはどんなにか驚き喜んだことでしょう。わが身を省れば、自らの垢に気づくこともなく自らの害毒を撒き散らしていることを、改めて恐ろしいと思います。

新型コロナウイルスにより多くの方が罹患され、世界的な混乱が引き起こされました。普段滅多にマスクをしない私も、今回はマスクをするようになりました。

「マスクエチケット」という言葉が使われ、外からの感染を防ぐという防御のためはもちろん、自らが保菌者となった場合に備え他者への感染を防止することが共有されるようになりました。昨年から一人暮らしの叔母が腰を痛め老人介護施設に入所しました。二月から入所者の外出は制限され面会も家族に限られました。面会に行く時はマスクをして行って、受付で熱を測ってもらいアルコール消毒した手で、新しいマスクに替えて

面会室で五分〜十五分ほどの面会です。（三月より面会謝絶）私は周りの汚れや病気には敏感に反応するのに比べて、自らの汚れや害毒に無頓着だったことを反省させられました

七仏通戒偈（釈尊を含む七代の仏が共通に説いた教え）には、

諸悪莫作 衆善奉行

自淨其意 是諸仏教

すべての悪をなすなかれ

多くの善を実行せよ

自らの心を浄めよ

これが諸仏の教えである

と説かれています。

しかし、実行するのはとても難しい。唐の詩人、白居易が鳥窠道林師に仏教の大意を質問しますと、道林師は「諸悪莫作 衆善奉行」と答えます。白居易は「そんなことは三歳の子供でも知っている」というと、師は「ところが八〇歳の老人でも行うことはできない」

と答えます。それを聞いて白居易は師に礼をなしたといっています。法然上人は次のようにおっしゃっています。

「廢悪修善は諸仏の通戒なり。しかれども当時の我らはみなそれには背きたる身ともなればただ偏に別意弘願の旨を深く信じて名号を称えさせたまわんに過ぎそうろうまじ」

すべての悪をなすなかれ
多くの善を実行せよ

は、諸仏が共通に説いた教えだ。しかし今の時代の私たちは皆それに背く身であるから、ただ偏に別意の弘願（四弘誓願＝諸菩薩が共に願う総願、とは別の阿弥陀仏の四十八願、特に十八願を指す）を深く信じて専ら名号を称えること以上にはなりません。

（『二百四十五箇条問答』）

私の母は掃除も片付けも上手でした。妹はその血を引いているのか整理整頓が得意です。私は全く

不得意、というか苦手です。

そんな私をも救ってくださると
いう本願を信じて念仏を称えてい
くしかありません。いつしか塵を

『心のふるさと』

(昭和三十一年二月発行)

土屋 観道 上人(眞生同盟初代主幹)

払い垢を除き「如来の光榮みぎかえを現す」
ことができる信じて。

南無阿弥陀仏

(477号より)

第四章 宗教の方法

一、聖浄二門と三学

聖浄の門は浄土教徒の方から釈
尊一代の仏教を分けたのであつて、
或は之を自力門とも他力門とも分
けて居ります。前者は戒定慧の三
学を修して此の世で仏となり、後
者は阿弥陀仏の本願に乗じて浄土
に往生するの教えであります。前
者は自己の力を主として修行し、
後者は弥陀の救いを主として念仏
するが故にそこに自力、他力の区
別も生じたのであります。

次に三学のうち、「戒」とは道
徳である。或は生活と云つてもよ
い。人生の究極は道徳的に云え

悪を廃し善を作して自己の心を清
浄ならしめる外ないのであります。

「定」とは三昧である、又禪定と
云っている。如来と融合する唯一
の方法であります。深く禪定を
修して雑念を絶し世間の妄想を払
うて仏心に冥合するは之に如くは
ないのであります。唯念仏による
か、座禅によるかで自力と他力の
違いかであります。

「慧」とは叡智慧であります。智
慧を研いて無常無我の理に徹する
の智慧であります。

二、本願の念仏

宇宙の本仏は自分で三学を成ず
ることの出来ない衆生の為に本願
を成就されました。西方の阿弥陀

がそれであります。浄土教では之
を指方立相と云っている。

そして此の浄土に往生する方法
が念仏であります。念仏は如来大
悲の本願に依つて凡夫救済の為に
回向せられた南無阿弥陀仏であり
ます。

三、三心具足

三心具足とは称える念仏は三心
を具すべしと云うのであります。
三心とは一に至誠心である。至心
とは真実の心即ちまごころであり
ます。

二に深心、之は仏の心であります。

三は回向発願心、之は阿弥陀仏
の浄土に生じたいと願う心であり
ます。

此の三心を具した念仏を三心具

選択本願の念仏 (二)

(『放送法話集 一紙小消息』より)

土屋 光道 上人(眞生同盟二代主幹)

(477号より)

(二)

次に、この本願ということが、

足の念仏と云うのであります。昔
から此の三心を具せぬ念仏は往生
出来ぬと云うのであります。

一心に念仏する者には自らそれ
が籠もっているのであります。

四、念仏三昧

念仏三昧とは一心に仏名を称え
てそれになりきることでもあります。
たとえ一声でも念仏するものは即
座にその御仏の光明に摂取せらる
るのであります。

而もこの念仏を相續して余念な
きを念仏三昧と云います。然し浄
土門では必ずしも定心の念仏でな
くてもよい。散心と云つて普通平
常の心の中から称える念仏であり
ます。(続)

わかったようで、なかなかわから
ないのであります。大經の法蔵菩
薩の話や、第十八願の念仏往生の

願など、頭ではわかったようで、さて、「現実のこの自分とどうかわかって来るのか」がよくいいたでない為に、念仏がともすると死んでから後の、遠い西方の世界へ行くための教えに陥っているのです。

ところで、本願の本という字には、本質的・根本的という意味と同時に、本来的・もともと、という意味があります。自然法爾ということにも通じます。従って、阿弥陀仏の本願は死後の世界だけでなく、今現に、この天地宇宙一切にもともと遍満し、活動し、我々をより真実に生かすよう一瞬も休まずに働いている愛の力を言うのであって、このもともと働いている大悲本願力をはなれては何物も真実に生きることが出来ないのです。

あります。

如来の光明が徧く十方世界を照らすそのままに、如来の本願が徧く一切を真実たらしむべく外から内から働いているのです。光明と

本願とは本来一つのものですが、光明の智慧が本願の慈悲となって働き出たところに、願いの宗教、慈悲門としての浄土教が発達したと言えましょう。

さて、人間は誰しも沢山の願いを持ち、その願望の充足を求めて生きています。しかし同時に、自分では気付いていないが、実に多くの願いをかけられている存在であります。

例えば、お母さんが私をお腹に宿した時から、どうぞよい子を授かりたいと願わなかったでしょうか。無意識のうちにも、どうか五体満足な、心のやさしく正しい立派な子が生まれて欲しいとどんなに心を配ったことでしょう。出産の苦しみに耐え、やれお乳、おむつ、それ病氣だ、ケガだ、進学、就職、結婚とその度に一貫して、母の愛、よき願いをかけられ今日まで育て来たわけであります。この母の願い、愛の力は決して自己中心的な願いではなく自分の中から発す

るが、しかも自分を越えたところから自分の中に働く愛の願力であります。

そして、これはほんの一例で、これ以外にも、どれほど多くのよき願いが私にかけられているか量り知れません。父や母や先生や友人の……、更にそれは人間ばかりでなく、毎日いただく一粒の御飯粒でも、その一粒が出来るのも、芽を出し、花を咲かせ、実を結ばせる、一切の衆縁の和合、天地の綜合力が働けばこそであります。私に食べられ、私の血となり肉となり、活動のエネルギーとなつて下さるその絶妙な智慧と力は、かくせしめる天地の、より真実なるものへと働く創造的進化の大願業力がもともと働いているからです。

草も木も みに光に照り

今日も また 大みいのちに
生くる嬉しさ(土屋観道上人)

念仏をしていると、我々は小さ

くは一粒のお米からも、大きく言えば、天地大宇宙から願いをかけられてかく存在し、かく生かしめられていることを知らしめられるのです。これが仏教的に阿弥陀仏の本願のもよおしにあずかるということ、その自覚の道が念仏であると思います。

かくて、無量の願いをかけられて生かされ、願われている自分であることが自覚された時、本願が本当に信ぜられたということになります。そして、念仏の中にそうした尊い願いをかけられたこの私であることに目覚めた時、この自分もまた尊いその願いをわが願いとして、現在只今から生きて行くという、新しい人生の歩みが念仏とともに始まるのです。

わたくしどもがもう一度、念仏の中に天地をみつめ、この自己を反省する時、いかに多くの仏様のめぐみに、盲目であったかに気付かされます。

みめぐみを
めぐみと知らぬ 愚かさを
ゆるさせ給へ 南無阿弥陀仏

さらに、願いに生かされ、願いに生きる。そこに無礙の一道を歩む念仏者の謙虚な、そしてたくま

「休む」と云うこと (『生活線上の宗教』より)

中野 尅子(善英) 上人

二日二晩も徹夜で御念仏をして、さぞお疲れでしょうから、さあ一服して下さいと云うて労って頂く御親切は有難いが、私には一服するなどと云う「休む」時は無い。

極楽は休む処でない。極楽へ行ったら益々忙しく、益々働かん

ならぬ。念仏はラクする事でなく念仏は働くことです。働く事は休む以上に楽しく、休む以上に愉快な事です。急行列車が休むのも、あれは休むのではなく、次に走るがために水や石炭を給水給炭するのであって、寧ろ走る為めの準備で

しい人生があるのです。

み仏の 給ひし生命

このいのち はてなく生きん
いとおごそかに

(以上二首中野善英上人)

食後の休憩も、実はより仕事の能率増進のための、形の違った働きで―働き、働き、働き働きの連続で、人生には一分間も実は「休み」のあるべき筈はない。休みの無いのが天地の実相で、「神は常に働き給う」仏は「常在靈鷲山」で「今も現に説法し給う」のが真理の姿です。

も心臓や肺は休んでいらぬ。それだから、細胞や組織は成育しづめに成長しているのです。

こんな天地は活動し活動し続けて休む事を知らぬ。だから発展し続けて日々に新に向上し文化して居る。これを思えばいつも心はいそいそと働き、活動し続けて己まぬ喜びを感じるのではなくて、

眞の天地の原理と一味し、如來のみ心に一如するものとは云えぬ。

だから念仏する程、活気を帯び元氣になって忙しく、極楽はラクするところではなく「闘う」処です。

たとえ不幸不運に陥入って、ペシャンコに打ちのめされても拳闘のダウンのように、次に飛びかかって行く呼吸をはかっているのであって、敗北も休止も無い。死んでも組織は新しく分散結合して新しい意図の下に永久に働く、働き働き進展し進展して「死滅」も「敗北」も「休止」もないのが、吾々の生ける姿ではないでしょうか。

学校の授業でも、一時間授業して十五分、二時間授業して十五分休む。これも休むので無く次の教科のための準備や、能率を高めるための注意力転換で、停止や、廃止ではないのです。休みに見える事も、実は遊んでいるのではない。会社や工場で十五分間の休止や、

疲労と云うことはあるか知らんが「休み」と云う事はない。夜寝るのも休んでいるのではなく、明日より元氣にウンと働くがために英気を養っているのです、これも形の変った働きです。精力を消耗したから、次の精力の盛り上って来るのを待っているだけで、休止では無い。精神はいつでも緊張で、病人でも精神力で弛緩し、崩壊したら、死ぬ。いつでる緊張々々、張り切り張り切りでいつでも伸びる機会と進出する機会をねらい。成長しづめに成長して、植物は夜の間にウンと育つ。寝る児は育つと云うのはソレです。寝ている間

加行成満報告

江東区 田中 典幸

二〇一九年十二月二十七日、明け方は雨降りだったが、昼前から雲一つない天気となった。私、田

中典幸はこの日に増上寺の伝宗伝戒道場を満行し、まさに晴れて浄土宗教師となったのである。佛教大学入学から約五年。今はゴールではなくスタートであると考えて気持ちを整えていたものの、その時の顔は緩んでいた様である。佛教大学在学中に土屋正道上人と出逢い、卒業後に得度した。その年の夏に教師養成道場に進み最短である三年で満行出来た事は、自分の努力以上に周りの方のご支援や応援、教育があったからこそであると感じに絶えない。今一度これまでを振り返ってみよう。

二〇一七年八月十九日は観智院名誉住職の本葬であり、養成道場入行前日であった。美容院で二センチの長さに髪を切り、文字通り

坊主頭となって臨んだ。ホテルでの供養席では化粧室に入る度にクロークの方に「そちらはご婦人用です」とご注意を受けた。僧侶になるとはある意味で性別を超えるものか、と感じた。

翌日、京都百万遍知恩寺に入行した。一期は浄土宗の日常勤行の実践と習得、仏教初歩の講義、そして食事など日常生活の作法を覚えていくのである。この入行にあたり自分だけでなく一緒に入行した仲間が一人残らず終了できる様に振る舞い、困った人がいたら出来る限り声を掛けていこうと誓った。入行者平均年齢の倍の年である私が唯一できることであると肝に銘じていた。私自身は講義には

困ることはなかったものの、音声実践で三回も声を潰した。女性の声域が出ず、偈文を理解しても声がついていかないという悔しい思いが残った道場であった。帰京し、師僧や兄弟子に指導され、尼僧を訪ね、発声について学ぶも手応え

のないまま次の道場を迎えた。

二〇一八年八月中旬、京都金戒光明寺にて第二期道場。不安よりも苦楽を共にした尼僧仲間との再会を喜んでいた。指導員から「たなかあゝ、何だか輝いているなあ」と幾度も声をかけられ、「尼僧御三家？」の一人と目された。九月に入ると、台風二十一号が京都に上陸し、風速六十五メートルを体験し避難することもあった。寺も一部が壊され皆で一日かけて清掃したことが思い出される。

京都の道場を終えた一年後、第三期の東京増上寺では、日常勤行が女性の声域でも可能となり日常生活の作法にも磨きがかかったと思う。今までの京都ではアウェイ(外様)の気持ちだったが、東京はホームであり六時礼讃や侍者作法の稽古を積んで入行した。

伝宗伝戒道場に向けて私は何が出来ないか、何が不足しているか、どうしたら十分に加行を受けられるかを常に考え、指導員に積極的

に質問を繰り返し、意見を交わした。終盤では道場生活が終わることに寂しさを覚えていた。

その年の十二月に伝宗伝戒道場、いわゆる加行に進むことができた。養成道場と違い宗門大学生も多く、百万遍道場からの尼僧仲間は三人しかいなかった。その内一人は感染症のため初日に下山するというショックを受けてのスタートとなった。

新しい作法をこの期間に覚える



奉告法要後 観智院本堂にて

ことに不安を感じつつ、指導員の熱い指導もあり、毎日教師になるとは、これからどうしていきたくいかを自問自答していた。講義では

自分の経机を前にし一言一句逃さない気迫で学んだ。第三期道場と同じく、加行道場が進むにつれて教師になって大丈夫なのだろうかと不安がつづってきた。しかし不安と同時に師の様な立ち振る舞い、お念仏の声で人々を教化していく僧になりたいと強く思った。

二十七日の成満会ではたくさんの方に祝って頂いた。あたかも結婚式のように、一人ひとり大殿の正面より表に出た。祝福された喜びと空の青さは終生忘れないだろう。

私は働く方々に向けて念仏を称えることをお伝えしていきたい。まずは第一木曜日の朝七時半より一時間の多聞院念仏会を続けていこうと思う。朝の清浄な空気の中で念仏の醍醐味を一人でも多くの人に味わってもらい、一日のよい

スタートが切れるように願っている。歩みを始めた念仏生活が続けられるよう精進して参ります。

訃報

眞生同盟理事

おんよめいゆう

溫馨明優居士

令和元年十二月二十八日逝去

土田明裕氏 五十八歳

通夜 令和元年十二月三十日 十八時

葬儀 令和元年十二月三十一日十一時

於 観智院本堂

眞生同盟理事・土田明裕氏が令和元年十二月二十八日にお隠れになりました。眞生同盟主幹・観智院住職、土屋正道師の下、観智院本堂にて通夜並びに葬儀を執り行いました。

謹んで哀悼の意を表します。

南無阿弥陀仏



明優居士通夜・葬儀 観智院本堂

行事報告

伊勢市慶蔵院大念仏会

二〇一九年十月二十六日(土)

二十七日(日)

伊勢市慶蔵院さまご住職前島上人のお招きで十二年、大念仏の会に伺っています。二十六日、下小俣町を十三名で念仏行脚。六カ所(山の神さま、お地藏さま、庚申さま、堀を作った重善さま、流行社さまなど)を巡り大念仏。報恩謝徳と諸願成就を祈念しました。



伊勢市慶蔵院大念仏会

二〇一九年十一月六日（水）

巡拝参加者

千葉 江草 喜美子

長野

福田由貴



第二十一番 大原・勝林院

団参初参加に深い思い！

横浜市
城所
和代

第四回 霊場参拝のお誘いは、正

道上人の還暦祝の席でした。それから書道教室の日程変更、急に決

またた十月カナダ行の為の変更も
 終えて、お陰様で初参加でまし

恩寺でした。大部屋におふとんは
久しぶり。

の身に力を戴き元気に過ごせまし

た。

青天が美しく紅葉の始まった京都の三日間。お念佛の先達に率い

られ、新しい友や、娘のような息

子のような若者がいて、細やかな

心遣いが有難い徒弟の皆さんのお

世話。御尊像を拝し 遺跡をめぐ

ぐつていると法然様がそばにいて下さるようで…。

観智院の素晴らしい御縁に感謝しています。『写真在中』団参ス



第二十二番 大本山知恩寺 衆会堂



大本山知恩寺 大念珠繰り

月輪寺にて

市川市 服部 道子

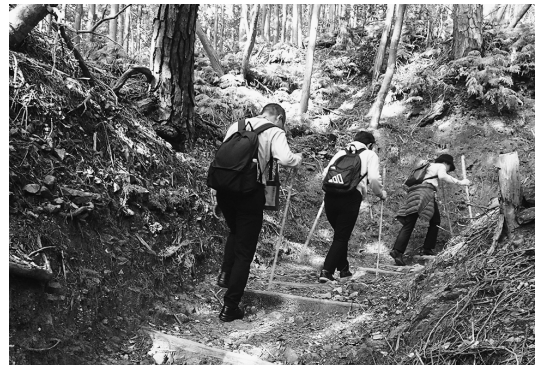
今回の九ヶ寺の中でも一番心に
残るお寺が第十八番の月輪寺です。



第十九番 嵯峨・法然寺

みです。福田哲也、由貴夫妻の準備、先導、すべてにお世話になりました。残るは四ヶ寺、五回目の参拝で成満ですね。
よろしく！
仲間に入れて下さった皆様に、尊敬と御礼を込めて、ありがとうございました。

合掌



第十八番 愛宕山・月輪寺まで登山

お歌は宗歌なので何回もうたってまいりましたが、こんな高い、奥深い山の中で修行なさり、お念仏をなさっていられたかと思うと只々敬服です。

七十歳になる私にはもう二度と登れないお寺でした。

そして、今尚このお寺を守り、関わっていらっしゃる方々を尊敬しています。

阿弥陀さまのすべての人を救おうとされる慈悲深い御心を思う時、そしてそのお心を頂いてお念仏を

申す人のみにお慈悲の光を頂けるという、だからこそしっかりと念仏を申しましょう!!

法然上人はこんなにも熱心にご親切に云って下さるのに、私はまだまだお念仏が足りないことをつくづく恥ずかしく思いました。

今後はお念仏に精進し、私という人間がもっと心清く、人格的にも深められ、人にも親切に優しくなれることが巡拝旅行に参加させて頂いた責務と思います。本当に感謝するばかりです。



第十八番 愛宕山・月輪寺



第十四番 小松谷・正林寺



第十五番 伏見・源空寺



第十六番 粟生・光明寺



第十三番 清水寺・阿弥陀堂

第十回鶴見念仏会

二月一日 西浦珠未さま邸

今年十回目の念仏会を開催してくださいました。ご子息や念仏同行と念仏・法話、持ち寄った精進料理で十一時から十五時まででありがたい法縁を喜びました。二〇一〇年一月、当時藤沢にあった西浦さまのお宅に法話に伺い、ご夫君の勝之さまも酸素吸入器をしながら話を聞いてくださいました。それから程なく勝之さまは御隠れになりました。珠未さまは台湾ご出身、彼女のご縁の方々が勝之さまご危篤の時から交代で病院に詰め常念仏をつとめ、御隠れ後もずっと念仏回向されていました。枕経に伺った私は、念仏を止めるに忍びずしばらくご一緒に念仏申しましたことを思い出します。通夜葬儀の導師をお勤めし、二〇一一年（東日本大震災の直前）から「毎年念仏会を開催してください」とのお申し出を頂き今日に至りました。

た。

普照院勝譽浄良居士追善菩提合掌

参加者

東京 土屋 正道
神奈川 西浦 珠未



鶴見念仏会 参加者と共に

第二十八回 一千礼拝行

二〇二〇年 二月十五日（土）

参加者

港区 土屋 正道
武蔵村山市 諸澤 正俊
板橋区 中村 立道
渋谷区 木村 演佳

神奈川

西浦 正恭
洪 美珠

中村 春美
大村眞理子
山本 直志



鶴見念仏会（蘇 和如さま追善菩提）

静岡県 小沢 文子
目黒区 無垢品 宗生
台東区 木村 吉裕
板橋区 趙 慶蘭
文京区 趙 新
目黒区 春山 啓子
新宿区 堤 祐一
江東区 田中 典幸



一千礼拝行

海老名市	大和市	大和市	さいたま市	松戸市	市川市	渋谷区	所沢市	港区	港区	港区
山根 健太	王 紅薔	高橋 隆雄	蘇田 三千穂	小泉 毅	服部 道子	和 桜	酒井 正空	土屋 由恵	土屋 遙	土屋 法道

眞生芳志感謝

476号以降に会費納入をして
くださった方々の眞生芳志録です。
至心に感謝申し上げます。

◆金三万二千元

静岡久保田修司

◆金三万円

東京高寺房子

◆金一万円

滋賀村田新太郎・千葉阿地敏子

福島東海林良雲・福岡本原信道

東京栄立院・神奈川石黒 毅

山形佐藤康正・福岡野瀬明隆

青森松山義幸・福島矢吹桂一

千葉磯岡哲也・山形齋藤滋明

東京西應寺・新潟相澤美弥子

東京大田眞祐・福岡生往寺

兵庫三枝樹・隆善

◆金五千元

東京飯塚和美・埼玉桑名晏子

東京川原均・千葉久我しづ

兵庫松永隆史・東京西城宗隆

群馬山岡良子・東京加藤瞭

◆金四千元

三重大西弘士

◆金三千元

長野平林つや子・神奈川林春美

◆金二千元

東京森強・三重楠木博子

千葉小岩井香予子・東京洪美珠

神奈川西浦珠未・太田愛子

◆金一千元

神奈川豊福久代

(敬称略)

お詫びと訂正

『眞生』四七六号「眞生芳志感謝」
の中に誤りがございました。

○誤「黒田俊広」↓正「黒田敏広」

○誤「國武香隆」↓正「國武秀隆」

○誤「◆金一万三十一円」

滋賀 阿弥陀寺」

←

正「◆金一万九千三十一円」

滋賀 阿弥陀寺」

お詫びして訂正いたします。

お知らせ

観智院LINE

観智院配信アカウント

この度、観智院専用のLINE
アカウントを作成いたしました。
左記にQRコード並びにURLを
掲載いたしておりますので、お
手持ちのスマートフォンやコン
ピュータからご登録ください。

皆様によりダイレクトな観智院
情報（行事案内など）をお届けい
たします。皆様からのご質問、連
絡にもお気軽にお使いいただけま
す。グループLINEと違い、他
の方に返信内容は伝わらないので
ご安心ください。

◆観智院LINE

<https://linee/giHeKa>



また、観智院の各行事をご自宅
や有縁の場所からご覧いただける
様に観智院配信アカウントを設け
ております。お手持ちのスマート
フォンやコンピュータから左記の
QRコード並びにURLにアクセ
ス下さい。

◆観智院配信アカウント

<https://youtube.com/user/Canchinvideo>



行事案内

第十五回二十四時間
不断念仏会in増上寺

↑増上寺での開催中止並びに開催
変更のお知らせ↑

この度、新型コロナウイルスの
感染拡大に鑑み、二十四時間不断
念仏会を増上寺で開催することを
断念いたしました。しかし、二十

四時間不断念仏会自体の開催を取
り止めるわけではなく、
五月二日(土)十三時

三日(日)十三時

の日程で主会場を不断念仏会事務
局が置かれる東京の観智院に移し
まして、観智院並びに姉妹寺院で
ある多聞院の各スタッフで観智院
会場を取り仕切りながら念仏、礼
拝、行脚などを配信、また世界か
らも念仏ライブ配信を行い、イン
ターネット配信を中心として厳修
いたします。

当日は一般参加を受け付け
ておりませんので、会場に
は入れません。予めご了承ください。

皆さまにおかれましては、世界
各地から配信されるインターネッ
ト中継 (<http://canchin.net/>) を
ご自宅などからご覧いただき、共
に念仏をお称えくださいますよう
お願い申し上げます。
また、インターネット中継をご
覧になるだけでなく、お持ちのコ

ンピュータやスマートフォンを
使ってご自宅や有縁の場所から中
継参加も可能です。お名前、連
絡先(電話番号、メールアドレス
スなど)、中継参加希望時間、回
向の願意(希望者)を明記の上、
FAX、メール、郵送などでお知
らせください。後日中継マニユ
アをお送りいたします。

お問合せ・申込先…

二十四時間不断念仏会実行委員会
〒105-0001

東京都港区芝公園2-2-13

観智院内

TEL: 050-5809-9416

FAX: 03-3431-7807

本行事特設

E-Mail: nenbutsu24@hotmail.co.jp

HP: <http://canchin.net/>

※増上寺への直接の連絡
はしないでください。

◎五月末の柏崎修養会を中止しま
す。

六時礼讃別時念仏会

日時: 六月十二日(金) 十八時半

十三日(土) 十八時

道場: 観智院本堂

※夕食を済ませお越し下さい

会費: 五千元

服装: 自由(僧侶はできれば黒如)

持ち物: 法要集(礼誦法)

※お持ちでない方はこちらで用意
いたします。

一日を六時に分け、四時間ごと
に仏を讃える善導大師の『六時礼
讃』を称え、仏様の周りを散華行
道して廻ります。

申込み締切: 六月九日

各種行事申込み先

FAX: 03-3431-7807

E-mail: masanichi@temai.ne.jp

※感染症の状況により、
行事を中止することが
ございます。

御承知おき下さい。